

国立民族学博物館の収蔵品②4

田の神(タノカンサア)



宮崎県えびの市末永地区のタノカンサア
2012年8月筆者撮影



日本の文化展示場のタノカンサア

国立民族学博物館(以下、みんぱく)の日本の文化展示場は、世界の中の日本という視点から日本の文化を紹介する展示場であり、祭りと祭礼、日々のくらし、沖繩のくらし、多みんぞくニホンという四つのセクションから構成されている。このなかで、日々のくらしのセクションは、日本人の日常のくらしの場として、里、海、都市、山のくらしを取り上げている。今回、紹介する田の神(以下、タノカンサア)は、里のくらしのコーナーに展示されている。

タノカンサアとは、田の神という資料名がついている通り、田を守り、豊穰を約束する神様である。春に山から降りてきて田の神になり、秋に収穫が終わると山に戻り、山の神となる。このような田の神の信仰そのものは稲作の盛んな日本においては、全国各地に分布する農村信仰であるが、タノカンサアのような石造の田の神は、南九州独特の形態であり、特に鹿児島県薩摩・大隅地方と宮崎県西部に分布している。年号が分かるものなかで最も古い造立のものは、鹿児島県鶴田町紫尾のタノカンサアであり、宝永二年(一七〇五年)の銘がある。

また宮崎県のものでは、えびの市中島のタノカンサアが享保九年(一七二一年)の銘があり、最も古いものとなっている。これら南九州に分布するタノカンサアは、大きく二つの形態に分類できる。一つは仏像型で、鹿児島県薩摩半島の北部地域で発生し、さらに仏像型、僧型、旅僧型に細分類できる。もう一つは神像型で、宮崎県の臼杵郡から発生し、神像型、神職型、田の神舞型へと細分類できる。民博に展示されているタノカンサアは、旅僧型であり、右手にしゃもじ、左手に茶碗を持っている。どちらもお米を食べるときに必要な道具であり、ここからも稲の豊作を願う人々の願いを垣間見ることができよう。

さて、宮崎県えびの市末永地区には派手なお化粧が施されたタノカンサアが密集して祀られている地域である。この末永地区は、もともとは水田だけが広がっている地域であった。しかし、災害が多かったことから、災害を沈め、豊作を祈願するため、鹿児島県川辺町(現在、南九州市)に依頼して、明治元年に現在、末永地区に伝えられているタノカンサアが建立された。その後、長い間、屋外に置かれていたことから傷みが進み、昭和五十三年に覆い屋を作り、現在のように祀るようになったとのことである。赤い衣装に、真っ白に塗られた顔、愛嬌たっぷりの表情は、見ているだけでもほっとする。現在は、毎年五月四日に区民全員でお化粧直しをして、お祭りが行われている。

これら石造のタノカンサアは、いずれも素朴で豊かな表情をしているが、見方によっては、泣いているようにも何か憂いているようにも見える。このような複雑な表情に、田植えから収穫までの農作業の厳しさから農民を守ること、さらには豊穰を約束する神としての役割の重さをひしひしと感じてしまうのである。

(日高真吾)